

kore ~ これから ~ kara

いっしょに描く まちのこれから 暮らしのこれから

VOL. **7** 2009 AUTUMN



まちのかたちは、
人のこころが創る。

■ 特集

見つめてみよう、わがまちの歴史

■ PEOPLE × PEOPLE

140人を超える地域ボランティア!
学校づくりからまちづくりの輪に発展

■ まちづくり INDEX

愛着のもてるまちを、自分たちの手で創る!

都市局まちづくり広報誌

 さいたま市

■特集

見つめてみよう、わがまちのヒストリー



まちのかたちは、

私たちが今住んでいるまちの、何げない風景。時とともに変わるまちの姿には、実は、人の想いやつながりが息づいています。そこで今回の特集では、まちづくりに込める「人のこころ」にスポットを当て、移りゆくまちを訪ねてみました。

与野本町通り



市民・商店会・行政が協働で取り組む

「蔵」を生かしたまちづくり

与野本町通りは、古くは武士が行き交う鎌倉街道として、また、江戸時代には農作物などを商う「市場のまち」として栄えてきました。まちの成熟にともない、度重なる大火に遭っていたこともあり、前庭と漆喰の壁を持つ土蔵づくりの町家が造られるようになりました。この町家は、現在でも点在



▲9月に開催された、4回目となる「蔵のまちコンサート」での、モンゴルの馬頭琴演奏。座席は、町内の畳屋さんがゴザを出したり、酒屋さんのビールケースの上に板を置いてベンチにしたりと、すべて手作り。ゆったりとした、温かい雰囲気が漂います。



▲昭和40年代の朝市の様子。時代を通じて培われた風景です。蔵づくり住宅の前庭は、大火を防ぐ火除けの役割とともに、市場の「場」としても活躍。まちに繁栄をもたらしました。

人のこころが創る。



文政年間の蔵づくり住宅、井原庸次邸の前で。バラのまち中央区アートフェスタ実行委員長の加藤圭子さん(前列右から3人目)を中心に、笑顔が弾ける実行委員の皆さん。

し、当時の面影をしのばせています。「蔵づくりのまちなみを地域の活性化に生かしたい」。このような想いが徐々に高まった平成18年。魅力あるまちづくりを市民が主体となって話し合う「中央区区民会議」で、「蔵のまちコンサート」のアイデアが生まれまし。舞台となる蔵づくりの家主さんも、「継続的な活動でまちの活気に繋がるのなら」と快諾。こうして、地元の有志や商店会、行政がひとつになって、実行委員会が設立されました。「少しでもまちがにぎやかになれば、商店会ももっと元気になる」と思い、喜んで引き受けました」と当時地元商店会の会長だった飯村八郎さん。さらに皆で準備を進めるうちに、「与野のまちを

コンサートで繋げよう」という想いに発展。「蔵のまちコンサート」に加えて、さいたま新都心での「LOVE & PEACEコンサート」、彩の国さいたま芸術劇場での「区民コンサート」の3部構成で開催する「バラのまち中央区アートフェスタ」として結ばれ、より魅力的なイベントとなったのです。コンサート当日は、来場者が会場からあふれるほどの盛況で、「バラのまち」ならではのかわいいミニバラの配布サービスも行うなど、かつての「市場のまち」さながらの熱気に包まれました。「与野の誇りとなるイベントを目指しています」と実行委員会会長の鈴木勝彦さん。アートを柱としたまちづくりは、これからも広がります。

まちづくりは、まちを知ることに挨拶から鈴木さんが地元に興味を持ったのは、会社の常勤を離れた5年前。50年も住んでいるのに、まちのことは何も知らないことに気づき、区民会議に参加。「歴史的背景を知り、まちにロマンを感じるようになりまし」と話します。

飯村さんは、まちづくりの秘訣について、「何よりも大切なのは、人と人とのつながりです。まずは挨拶から始めよう」と教えてくれました。



▲実行委員会副会長の鈴木さん(左)と、西与野商店会連合会前会長の飯村さん(右)。



◀開設間もないころの武蔵浦和駅周辺。上が大宮方面、下が東京方面、線路の左側は、昭和39年に開業したロッテ工場。まだ、高層ビルは1棟もありませんでした。



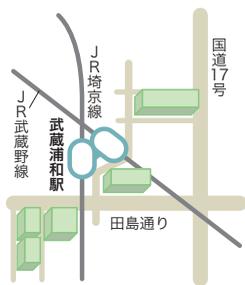
▲地元の信頼を築きながら、現在は武蔵浦和駅周辺まちづくり合同推進協議会会長を務め、再開発事業を後押しする細刈さんと奥様。「今後のまちづくりの課題は、学校や公園、駐車場などを充実させることでしょうか」と話します。

▼武蔵浦和駅に直結する歩行者デッキ、植栽や彫刻などが配され、商業・業務・住宅などの複合機能を備えた「ラムザ」。その後も、周辺地区には「ライブタワー」「ミュージシティ」「ナリア」などが次々とオープン。平成23年度末には、区役所や図書館などを備えた公共公益施設が整備される予定です。

高層ビルが次々に建ち並び、刻々と新しい姿を見せる武蔵浦和駅周辺地区。しかし、かつてこのあたりは農村の風景が広がっていたことをご存知でしょうか。転機は昭和39年。土地改良事業にともなう道路が整備され、徐々に宅地化が進んでいきました。さらに、昭和60年には埼京線が開通。武蔵野線と交差する武蔵浦和駅の誕生を起爆剤に再開発事業がスタートし、まちは大きく変貌を遂げていったのです。

この地で長年自治会長を務めていた細刈秀雄さんは、当初は再開発を懸念していた住民に対して、勉強会や視察で丁寧な説明を重ねるなど、行政とともに準備を進めました。その結果、平成10年には27階の超高層ビル「ラムザ」が完成。約800人が住み、千人が働く空間として生まれ変わりました。「再開発は、新しいまちづくりの絶好のチャンス。先を見据えて前へ進む、これが私の信念です」と胸を張ります。

「農村」から「副都心」へ 職住近接型の複合都市を目指す



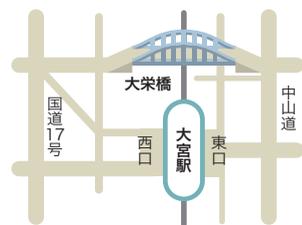
武蔵浦和



▲昭和30年ごろの踏み切りの様子。右が大宮駅、左が高崎方面。写真奥の東口と手前の西口とを往来する人で混雑しています。その隣には、人がすれ違うのがやっとの跨線橋がありましたが、長い階段を嫌がり、利用する人は少なかったようです。

線路で隔てられた東西を結び まちに広がりをもたらし大栄橋

大栄橋



県内最大のターミナル駅、大宮駅の北側に位置し、線路をまたぐように架かる大栄橋。この橋ができる以前は、2分開いては3分遮断される「開かずの踏み切り」で、列車の通過を待つ人々の姿がありました。当時、踏み切りそばで両親が和菓子店を営んでいた山崎さんは、この橋を通してまちの姿遷を見てきた一人です。「踏み切りがあったころは大宮が線路で分断されていて、何かと不便でした。ただ人通りは多く、この街道沿いにお店が建ち並び、活気にあふれていたものです」。その後、住民の長年の悲願だった大栄橋が昭和36年に完成すると、人の流れは一変。東西方向の往来がさらに活発になった半面、車社会への転換もあり、商店街へ足を運ぶ人が伸び悩みました。そんな中、山崎さんは「並べておけば売れるという商売でなく、時代のニーズに合った商品を置いて、お客

さんに足を運んでもらおう」と発想を切り換え、新たに若者向けの洋品店を始めました。その後、徐々ににぎわいも戻り、商店街に活気が戻ってきました。「大栄橋でまちに広がり生まれたい時に、今後のまちづくりにも期待したいです」と話します。



▲大宮銀座商店街協同組合の会長も務めた、山崎森巨さん。大宮駅東口で年2回行われているフリーマーケットを始めるなど、地域の活性化に取り組んでいます。



▲大宮駅の夜景に映える大栄橋。当時1100余点の応募の中から決定したこの橋の名称、実は「たいえいばし」と読みます。



岩槻「市宿通り」

道路の拡幅計画をきっかけに

宿場町の面影を再現させるまちづくり



岩槻城の城下町として発展し、後に日光御成街道の宿場町としても栄えた「市宿通り」。その名の通り定期的に市が立ち、多くの人々を集めました。現在も創業200年の商家や、昭和初

「自分たちの手で、この地の歴史を大切にしたい。市宿通りの拡幅計画をきっかけにこうした思いが湧き上がり、まちづくりが始まりました。市宿商店会の人々を中心となって「市宿通り道路整備協議会」を設立。視察や勉強会、意見交換などを重ねた結果、平成12年に「まちづくり規範」を策定し、建物の保存や色彩の調和など、地域の自ルールを定めたのです。「皆で守るルールづくりには苦労しましたね。特



▲昭和20年代前半(左)と、現在の市宿通り。どちらも、郷土資料館の屋上から撮影したものです。道路拡幅工事は、昨年からはスタート。建物を新築や改築する場合には、「市宿通りまちづくり規範」に基づいた家が誕生しています。歩道からさらに1m下がった空間は、イベントスペースなどとして活用する計画です。このような活動が評価され、平成17年度には「さいたま市景観協力賞」を受賞しました。

に沿道の方々には多くの負担をかけたから」と、当時を振り返るのは会長の萩原良咲さん。
現在は、かつての宿場町を感じさせる景観づくりにも取り組むなど、まちなみは、着々とその姿を変えています。「まちづくりは一人では決してできません。皆で培った地域への愛着を大切にしながら、誇りに思えるようなまちを残したいですね」と、まちづくりへの思いを語りました。

▶江戸末期創業の和菓子店。平成4年、道路に面した部分を解体し、蔵の部分を補修して建て直しました。歩道では、電線を地下に移設する工事が始まったところです。



▲市宿通り道路整備協議会会長の萩原さん(中央)と、副会長の天祐一男さん(左)、星野裕孝さん(右)。後ろは、芳林寺にある太田道灌公の像。太田道真・道灌父子は、室町時代に足利成氏の命を受け、岩槻城を築城。この寺には、道灌の遺骨と遺髪が葬られていると伝えられています。

活動は、継続と情熱と団結力

活動を続けていくには、「情熱と団結力が不可欠です。祭りや視察など、イベントをいっしょに行うことで気持ちが一いつになりました」と会長副会長の皆さん。最近では、通りのにぎわいも増え、「良い環境が整いつつありますね」といわれるようになりました。今後は、商業の活性化に結びつけることが課題です。

「まち」に想いを込める人たちに出会って



まちの発展を願う人たち、かつての懐かしいまちなみの再現を目指す人たち、まちの変化にあわせて新しい発想で生き抜く人たち…。今回の特集で実際にまちを歩き、皆さんにお会いしてみると、それぞれの地域に活力を感じるとともに、まちに対する愛着や温かさ、そして、人と人との絆の大切さ

が印象深く感じられました。せわしない日常の中で、見過ごしてしまっている何げない風景やまちなみ。しかし、それらの陰には、その地で生きてきた人たちの「こころ」や、今まさに動き出そうとしているエネルギーが充ちているのかもしれない。

この機会にちょっと足を止めて、皆さんも、目の前の「まちのかたち」に想いを馳せてみませんか。



▲ビオトープの除草作業を元気いっぱいに行う子どもたち。生き物や植物を観察できるこのスポットは、遊びだけでなく、貴重な学習の場となっています。

▶花壇やフェンスの花を手入れするボランティアの方々。鉢は、ペットボトルを切ったりサイクル、道行く人から、「お花畑の中に学校があるみたい」と声をかけられます。

活動を支える地域ボランティア 自由な時間に来て自主的に作業

このような、「自然・生き物との触れ合い」を教育の柱とする日進小学校の活動を支えているのは、地域ボランティアです。その数は何と、延べ140人！環境ボランティア誕生のきっかけは、四方のフェンスに取り付けてあるフラワーポットです。栽培場所が広範囲で水道場からも遠く、花の維持が大変な様子を見て、近所の方々

が自主的に水やりを行ったのが始まりでした。水やりは、毎日朝夕2回。この活動を続けるうちに、理解し協力してくれる人の数も増え、地域の触れ合いが深まっていきました。「私たちは皆、花や緑が大好きです。フェンスが花でいっぱいになるのは、ボランティアとしての誇りです」と話します。そして、保護者や地域の方の間にも活動が広がり、平成16年には、さまざまなボランティアグループが誕生しました。たとえば、除草、種まき、植え替えを行う「環境ボランティア」のほ



▲子どもたち、先生、ボランティアの方々が「ビオトープ」の入り口に集合。生き生きとした、明るい表情が印象的です。
◀平成21年度「全日本学校関係緑化コンクール」の受賞式。校長先生を挟んで石川重雄先生(左)と、玉串栄二先生(右)。

PEOPLE × PEOPLE

ピープル × ピープル

140人を超える地域ボランティア！ 学校づくりからまちづくりの輪に発展

さいたま市立
日進小学校

今回のPEOPLE×PEOPLEは、小学校がステーションです。さいたま市立日進小学校を訪ね、地域と学校、保護者が一体となって取り組む緑化運動、そしてまちづくりへと繋がる活動についてうかがいました。

自然を復元した「ビオトープ」で 植物や野鳥、虫たちと触れ合う

皆さんは、「ビオトープ」という言葉をご存知ですか？「ビオトープ」とは、「野生生物の生息空間」という意味です。都市の中に植物や昆虫、鳥や魚などが共生できる場所を復元するもので、近年では、河川敷や公園をはじめ、学校の校庭やビルの屋上などを利用した、小さくさまざまな「ビオトープ」が誕生しています。

さいたま市立日進小学校が「学校ビオトープ」を設営したのは、平成11年。日進小学校は、JR川越線の日進駅前通りに面した市街地に位置するため、

学区内には自然や生き物と触れ合える場所がほとんどありませんでした。そこで、子どもたちが自然のサイクルを体験したり観察したりできる場として、敷地の一角約500㎡に雑木林や池を設けて自然を呼び戻したのです。その後は、野鳥が集まるようリンゴやミカン、カキなど実のなる木、約100本を植樹。さらには虫たちの生活空間や、緑の中で読書や給食を楽しむテラスなどを新設して、ビオトープエリアを約2倍に拡大しました。また、通りのフェンスには、全校児童から集めたペットボトルを使って480個ものフラワーポットを取り付け、季節の花を植えて地域の美化に努めています。

か、生物の保護をする「かぶと虫ボランティア」。中でも頼もしいのは、約40人の保護者による「おやじの会」です。毎月1回、先生もいっしょに参加して、親子で土運びを行い、ビオトープ周辺の道の杭打ちや木道作りなど、主に力仕事を担当しています。

「学校ビオトープ」を核として 学校づくりからまちづくりへ

取材は、残暑の日差しが強い午後。10人以上の「環境ボランティア」の方が訪れて、キビキビと水やりや草むしり、ゴミ拾いなどを行っていました。保護者だけでなく、中高年の方も多くみられます。驚くことに、ボランティアのシフトはいっさいなし。特別な作業以外は、好きなときに来て好きなだけ活動をしています。「作業が終わると、きれいになって気持ちがいい！」「心が沈んでいるときでも、学校にくと元気になります」と楽しそう。継続の秘訣は、無理のない活動、そしてそれを陰で支える先生達のサポート。いっしょになって汗を流す先生と子どもたちの元気な様子に心を動かされ、それが励みとなり、心をひとつにした連帯感が繋がっているのです。

このような地域と学校、保護者が一体となって「学校ビオトープ」の運営や敷地内外の緑化に取り組む活動が評価され、数々の賞を受賞。平成21年度には、「全日本学校関係緑化コンクール」で全国2位に輝きました。

また、昨年からは、地域の連携をより深めたいとの思いから、学期に1回ボランティアの方々とは昼食会を開催。夏休みには、学校の得意分野を地域に還元しようと、先生達による「日進小講座」も開講しています。さらに今年度は商店街や自治会、子ども会などの会長さんの協力を得て「日進小学校を支える地域の会」を結成。学校という枠を超えた横のつながりに努めています。下條清校長先生は、このように語ります。「このビオトープを核として、学校づくりからまちづくりへと、地域への輪が広がっていくこと。これが、私たちの何よりの大きな目標です」。

まちづくり Index

このコーナーでは、都市局よりまちづくりに関する制度や情報などを、わかりやすくお伝えするページです。



愛着のもてるまちを、自分たちの手で創る！

「まちづくり支援制度」を活用した、浦和西高台地区のまちづくりレポート

「豊かな住環境を守りたい」「緑と日照のあふれるまちなみにしたい」…そのような思いから地域の人たちが集まり、活動を始めました。皆さんは、このような活動をサポートする「まちづくり支援制度」をご存知ですか？
今回の「まちづくりINDEX」では、浦和西高台地区を訪ね、この制度を活用したまちづくりに携わった方々に語っていただきました。

「このまちなみを守りたい」まちへの想いから実行へ

私たちが住む浦和西高台地区は、1960年代後半に開発された82軒の戸建住宅地です。あちこちで老朽化による建て替えや住民の入れ替わりが目立ってきた10年ほど前、「この住み慣れた環境が大きく変わってしまうのでは」という懸念を私たちは抱いていました。その頃、地区のまちなみのルールを自主的に定める「地区計画制度」（左ページ下解説1参照）があることを知り、皆で問題意識を

共有して輪を広げながら、制度の活用を検討し始めました。この地区への想いは皆それぞれで、意見がまとまらず、なかなか話が前に進まない時期もありましたが、平成19年、一念発起して決意を新たに固め、組織づくりに着手。自治会から独立した形で「地区計画委員会」を発足させ、地区内の建築物などのルールづくりを行うまちづくり活動をスタートしました。

Point きっかけはまちに対する想い。そして、強い決意と実行のための組織づくりが、まちづくりの原動力に。

支援制度をフルに活用 まちづくりの活動が加速

活動に際して市に相談したところ、「まちづくり専門家派遣制度（解説2）」と「まちづくり支援補助金交付制度（解説3）」の活用を勧められました。「専門家派遣制度」では、市から派遣された専門家の方が親身になって私たちの相談にのっていただき、委員会の進め方の指導や先進事例の視察なども実施していただきました。ポイントを突いたアドバイスは、さすが専門家の他の地区の課題や苦労話などを、自分

Point 地域の身近なまちづくりをサポートするさまざまな「支援制度」。まずは市に相談を。そして、積極的な活用を。

「まちに対する想いと客観的な視点、これがまちづくりの秘訣だと感じています」

まちを知り、意見を集約 ついに「地区計画」へと結実

地区計画を定めるには、地権者が内容を十分に理解して、合意にいたることが重要です。ほとんどの方は活動に前向きでしたが、「建て替えるときに不自由なのは？」「土地の価値が下がってしまうのでは？」など、不安を抱く方もいらっしゃいました。そこで、第一歩として、「自分たちのまちを皆で見よう」と、実際に地区内を歩いて調査を行い、自分たちの家の状況などを改めて把握しました。そして、それらを客観的な数値データや模型などで表わし、そこでの問題点を地権者全員の共通課題として考えられるように説明。勉強会の開催やまちづくりニュースの発行などにより、情報の共有や発信に努めました。さらに、できるだけ多くの考えを取り入れるた

Point さまざまな意見を取り込み、理解を深めたことで、地域の想いがひとつに。皆で進めるまちづくりには、情報の共有や発信、丁寧な説明が大切。

めに、不安を抱く方にもあえて委員会へ積極的に加わっていただくことで、理解が深まってきました。このことよって地区がひとつになり、ついに平成20年に地元案が完成し、市により都市計画決定されました。

まちづくりに「ゴールなし」さらに快適なまちを目指して

「地区計画」の策定でまちづくり活動が終わったわけではありません。その後、より良いまちを目指していくために、地区計画委員会を「まちづくり委員会」へと発展。今年度は、行政との連携や地域コミュニティをさらに深めながら、防災マニュアルの作成に取り組みなど、積極的な活動を行っています。「快適」と「愛着」をいっそう感じられるまちを目指して、自らの手で創り上げる活動を、私たちはこれからも広げていきたいと思っています。



▲低層の住宅が連なる浦和西高台地区。緑の植栽や見通しの良い塀の使用などが盛り込まれた地区計画で、豊かな住環境が守られます。
▲段ボールで作った建物の模型や模造紙の見取り図などで、ルールづくりを視覚的にわかりやすく説明。委員会は計17回開催、まちづくりニュースも12号まで配布しました。



▲防災倉庫とともに新しく整備された公園。花壇の手入れは、住民が自主的に行っています。

地域が主役となって取り組む「まちづくり」。その活動の流れや、そこに息づく人々の熱意を感じていただけたでしょうか。ここで取り上げた「まちづくり支援制度」や「地区計画制度」などについて興味をお持ちの方は、下記へお問い合わせください。

まちづくり推進部 まちづくり総務課 TEL 048-829-1444	「まちづくり専門家派遣制度」や「まちづくり支援補助金交付制度」などで、地域のまちづくり活動のお手伝いをします。
都市計画部 都市計画課 TEL 048-829-1409	都市計画内容の確認のほか、「地区計画」「まちづくり協定」など、まちづくりのルールに関する相談をすることができます。

◆用語の説明
解説1 地区計画制度
 住民の参加により、地区の特性に応じたきめ細かいまちづくりのルールを定め、計画的な市街地形成を目指す制度です。地区の目標や方針を明確にし、道路などの施設や土地利用、建築物などの具体的なルールを定めます。
解説2 まちづくり専門家派遣制度
 まちづくり活動を行うグループの集会や研究会などに専門家を派遣してお手伝いをします。この制度では、おまに「きっかけ」から「仲間づくり」の段階の活動について支援をします。
解説3 まちづくり支援補助金交付制度
 集会や勉強会の開催、ニュースの発行、事業計画の作成など、自主的なまちづくり活動に必要な費用の一部を助成します。

制度に関する情報は、さいたま市ホームページからもご覧いただけます。【トップページ「暮らしのガイド」→「まちづくり・交通」】

まちのお宝箱 

どう かん さん がん し みず
太田道灌ゆかりの「三貫清水」(北区)

お宝推薦人

大宮区在住 吉野 忠夫さん



私の主宰する「歩いてつくる街絵図会」は、さいたま市を中心にまち歩きをして、発見した「まちのお宝」を各自が B6 判にスケッチで記録する会です。そうした活動の成果を、さいたま市が 10 区となった区切り

として、3 年前に個展「さいたま市面白カルタ」の形で発表しました。

そのカルタの中に、「三貫清水」を題材にした一枚があります。江戸城を作った太田道灌は埼玉にも縁のある戦国武将で、狩りで当地に来た道灌に、農民が湧き出る清水で茶を献じると、道灌その美味に大いに喜び、三貫文(現在の価値で数十万円)を賜ったという伝承によります。そこで、読み札は「名水に 道灌ポンと 50万」としました。

北区奈良町の大宮北高校の南西、鴨川との間に広がる「三貫清水緑地」は、そうした道灌の伝承を裏付けるように、復元された鎌倉街道が見られ、草木 500 種、鳥 50 種ほどが生息する、市民の貴重な「お宝空間」となっています。

現在は「三貫清水の会」の皆さんが、毎月第 2 日曜、北高正門前に 10 時に集合して、清掃活動をされています。私も参加しましたが、この日は新規参加が 7 名もおられるなど、市民の自然保護への関心の高さがうかがえました。

「まちのお宝箱」の記事と写真を募集しています。
詳しくは都市総務課(☎829-1394)まで



「korekara」編集後記

今号では、昔と今の印象的な写真を掲載しました。懐かしく感じられたり、まちの移り変わりを改めて意識されたりなど、いろいろな受けとめ方をされたのではないのでしょうか◆また、さまざまな方々に登場していただき、まちへの想いを語っていただきました。まちづくりを、少しでも身近に感じる「きっかけ」となればと思います◆多くの方のご支援もあり、今年度は年 2 回の発行となりました。次号は 3 月に発行予定で、「景観」について取り上げたいと考えています。ご期待ください。(中野・鳥山・堀田)

ご意見・ご感想をお待ちしています!

「korekara」は、皆さんの声を反映させた誌面づくりを目指しています。ご意見やご感想、ご要望などをぜひお寄せください。また、ホームページでは、誌面の紹介やこぼれ話などを随時更新しています。ぜひアクセスを!

■あて先: 〒330-9588 さいたま市浦和区常盤6-4-4 都市総務課あて
TEL: 829-1394 FAX: 829-1979
Eメール: toshi-somu@city.saitama.lg.jp

■ホームページ: 『korekara』WEBサイト
(さいたま市ホームページ「暮らしのガイド」⇒「まちづくり・交通」⇒『korekara』WEBサイト)



さいたま市 korekara

検索